

小学校教諭の目から見た英語活動中の児童の様子

——児童の不安に焦点を当てて——

松 宮 奈 賀 子*

1. 研究の背景と目的

1998年の小学校学習指導要領改訂によって「総合的な学習の時間」の中での「英語活動」実施が可能になり、それ以降多くの小学校が英語活動に取り組んできた。しかしながら各学校における取組みには相当のばらつきがあり(文部科学省, 2008)、近年では学校間の格差が大きくなりつつあることがしばしば指摘されるようになった。また中学校における英語教育との接続においても困難が生じてきているという実態があった。このような現状を打開し、教育の機会均等を確保し、中学校との円滑な接続を実現する等の観点から2008年3月に行われた新しい小学校学習指導要領の改訂において、小学校第5学年および第6学年に「外国語活動(英語を取り扱うことを原則とする)」が新設されることとなった。

これまでの英語活動における基本理念は小学校段階から「英語嫌い」を生み出さないことであり、小学校英語活動は「楽しくなければならぬ」と強調されてきた(文部科学省, 2004)。新しく導入される「外国語活動」においても「コミュニケーションを円く楽しむ(下線筆者)」を体験させることが重視され、児童が積極的にコミュニケーションを円くしたいと思うような題材を用いたり、活動を行ったりすることが大切であると考えられている(文部科学省, 2008)。このように「楽しむ」を体験する中で英語への興味関心や学習意欲を高めていくことが望まれるが、そのような授業を行うためには授業内容のみならず、児童の「気持ち」への支援も重要であると考えられる。影浦(2000)は小学校英語活動において「英語嫌い」を生み出す要因のひとつとして「教師に新しいことを覚えさせたいという思い込みがたつと、子どもたちが不安感や緊張感を覚え、活動に興味を失う」ことを挙げている。また、

* 広島経済大学経済学部講師

小学校学習指導要領解説（文部科学省，2008）でも「児童の自己表現したいという気持ちやコミュニケーションを図ることへの興味を失わせることのないよう」に、指導が「必要以上に細部にわたったり，形式的になったりしないよう」に留意することが述べられている。これらのことから，これからの「小学校外国語活動」においては細かい内容指導や習得を強要するのではなく，子どもたちが積極的にコミュニケーション活動に参加できるよう支援していくことが重要であると考えられる。

このような「外国語活動」の実践のためには児童の実態を把握している学級担任の教師（以下 HRT）の存在が欠かせないと小学校学習指導要領解説（文部科学省，2008）は指摘しており，HRT には「児童が初めて出会う外国語への不安を取り除き，新しいものへ挑戦する気持ちや失敗を恐れない雰囲気を作り出すために，豊かな児童理解と高まりあう学習集団作り」が求められている。外国語学習における不安は学習を妨害する作用を持つと考えられており，不安が強い学習者は複雑あるいは個人的なメッセージを伝えようとする試みを回避する傾向にあることが示されている（Horwitz et al., 1986）。また，Young（1990）は他の学習者の前で話す場面が学習者の不安生起に大きく関わっているとし，コミュニケーションな外国語学習が抱えるジレンマを指摘している。小学校外国語活動も「聞く」，「話す」の口頭コミュニケーションを中心としたものとなると考えられ，この点においても児童の積極的なコミュニケーション参加を促すためには児童の不安を取り除き，学習への前向きな気持ちをサポートしていくことが重要となるであろう。

望ましい「外国語活動」のためには HRT の役割が重要であることは先述のとおりであるが，適切な支援を行うためには HRT による正しい児童の実態把握が大切となる。そこで本稿においては，授業時の児童の様子を最もよく知る HRT への質問紙調査を通して，英語活動時における児童の実態把握を試みる。HRT の目から見た児童の様子を探ることにより，効果的な支援の在り方へのヒントを模索したい。

2. 調査概要

2.1 調査目的

この調査は HRT（学級担任）の目から見た英語活動時の児童の様子を知ることが目的としておこなった。児童の気持ちに寄り添った授業展開を可能にするためには HRT による児童の実態把握が必須と考えられる。そこで本調査では英語活動中の児童の様子をどのように HRT が感じ取っているか，そして特に積極的な学習参加を妨害すると考えられている「不安」や「緊張」を抱える児童に対してどのよう

な支援を行っているか、あるいは行うことが良いと考えているかを調査する。本調査から得られる結果から、より児童にとって適切な支援の在り方を探ることができると考える。そのための基礎情報を得ることを本調査の目的とする。

2.2 調査方法

2.2.1 調査時期

調査は2008年8月19日および2008年8月27日に行われた。なお、各日の回答者は異なる。

2.2.2 実施方法

アンケート用紙は調査者（松宮奈賀子）によって調査会場に持参され、調査の目的、概要を調査者が口頭で調査協力者に説明し、その場でアンケート用紙を配布した。回答用紙の回収は、回答が終了し次第、用意された回収箱に投入する方法によって行われた。

2.2.3 質問紙

質問紙はA3サイズ用紙の両面印刷1枚であった。A3サイズ用紙を半分（A4サイズ）に折り、表紙に当たるページにおいて調査協力者の性別、年齢、指導経験などの基礎情報を求めた。残るページは全8問の質問で構成された。具体的には巻末の付録を参照されたい。

2.3 調査協力者基礎データ

調査協力者についての基礎的なデータを以下の表1から表6に示す。

表1 回答者人数

2008年8月19日	61名
2008年8月27日	61名
合計	122名

表2 男女内訳 (122名全体)

男性	42名	34.4%
女性	79名	64.8%
不明	1名	0.08%
合計	122名	100%

表3 年齢内訳

20歳代	22名	18.3%
30歳代	38名	31.7%
40歳代	43名	35.8%
50歳代	18名	14.2%
不明	2名	1.6%
合計	122名	100%

表4 教員経験年数内訳

5年未満	24名	19.7%
5年以上10年未満	21名	17.2%
10年以上15年未満	12名	9.8%
15年以上20年未満	15名	12.3%
20年以上25年未満	28名	23.0%
25年以上30年未満	14名	11.5%
30年以上	7名	5.7%
不明	1名	0.08%
合計	122名	100%

表5 英語活動指導経験内訳

なし	36名	29.5%
3年未満	73名	59.8%
3年以上5年未満	8名	6.6%
5年以上10年未満	4名	3.3%
不明	1名	0.08%
合計	122名	100%

表6 中学校/高等学校 英語教員免許状有無内訳

なし	112名	91.8%
あり	7名	5.7%
不明	3名	2.5%
合計	122名	100%

3. 結 果

上記2.3 調査協力者基礎データの「表5 英語活動指導経験内訳」からも分かる通り、今回の調査協力者の約30%が英語活動指導経験を持たないという結果であった。そのため、これらの調査協力（指導未経験者）の多くはほとんどの問い

に回答できなかった。以下に結果を示すが、未回答が多くあることは上記の理由に由来するものと考えられる。以下、問1から問8までの質問への回答結果を1問ずつ示していく。

3.1 問1

「英語活動の時間に英語で発表を嫌がったり、消極的だったりする児童はいますか？
1つ選んで✓をつけてください。」

この質問に対しては「かなりいる」、「数人いる（5人程度を目安）」、「ほとんどいない（3人以下）」、「全くいない」の4択からの回答を求めた。

表7 問1 回答結果

かなりいる	21名	17.2%
数人いる（5人程度を目安）	32名	26.2%
ほとんどいない（3人以下）	30名	24.6%
全くいない	1名	0.08%
未回答	38名	31.1%
合計	122名	100%

表7に示した結果を見ると、「全くいない」と回答したHRTは1名にとどまり、どのクラスにも英語での発表を嫌がったり、消極的だったりする児童の存在があることが伺える。また、17%強のHRTは「かなりいる」と答えており、このような児童への対応を検討することは重要と思われる。

3.2 問2

「上の質問で『かなりいる』、『数人いる』、『ほとんどいない』を選ばれた方へ。その理由は何だと思われますか？当てはまるものに✓をつけてください（複数可）。また、その他のご意見があれば、記述してください」

この質問では、「発表を嫌がったり、消極的態度をとる理由」を「もともとの性格」、「英語に対する自信のなさ」、「英語に限らない学習意欲の低さ」、「クラスの雰囲気」、「その他」の5つの選択肢から選んで回答することを求めた。なお、複数回答可としたため、問1での英語活動における消極的な児童の存在を指摘したHRTの人数（84名）とこの質問への回答の数値は一致しない。以下には未回答者（英語

活動指導経験がなく、全質問に未回答であったもの) 38名およびこの質問に対する欠損(理由不明の未回答) 4名, 消極的態度の児童はいないと回答した1名を除いた有効回答者79名のうちそれぞれの質問(「○○という理由で英語での発表を嫌がったり, 消極的になったりしている」)に対する YES の占める割合をパーセントで示した。なお, 複数回答を認めたため, それぞれの質問に対するパーセントの合計は100%にならない。

表8 問2 回答結果

発表を嫌がったり, 消極的態度をとる理由	YESの人数	割合
もともとの性格 (大人しい, 消極的, 恥ずかしがり屋など)	65名	82.3%
英語に対する自信のなさ	48名	60.8%
英語に限らない学習意欲の低さ	21名	26.6%
クラスの雰囲気	9名	11.4%
その他	4名	5.1%

上記表8の結果から, HRTの多くが英語活動における児童の消極的態度を生来の性格に起因するものと捉えていることが分かる。しかしながら同時に6割以上のHRTが英語に対する自信のなさが消極的態度につながっていると考えていることも明らかになった。もともと積極的に話すことを苦手とする児童に対しては, あたためたかきクラスの雰囲気づくりや教師のきめ細かな配慮によって少しずつ克服していく道を探ることが良いと思われるが, 一方の英語に対する自信のなさから消極的になっている児童に対しては, より多くの成功体験を重ね, 自信をつけられるよう支援していくことが有効と考えられる。

なお, この質問に対して「その他」と回答したHRTの自由記述からは, 英語活動における児童の消極的な態度の背景理由として「今までの授業パターンと異なり戸惑っている」, 「発音することに不安を感じている」, 「高学年になるとどうしても歌ったり, 踊ったりは恥ずかしくてできなくなる」, 「高機能自閉症というハンディキャップのため」が挙げられた。新しく導入される授業であることから1年生から4年生までの時間をかけて培ってきた学習スタイルをそのまま応用することが出来ない授業であることに戸惑う児童への支援や, 高学年特有の心的発達段階への配慮が積極的な授業参加を支える鍵となることが本質問への回答から伺える。

3.3 問3

「問1で『全くいない』を選ばれた方へ

その理由は何だと思われますか？当てはまるものに✓をつけてください（複数可）。また、その他のご意見があれば、記述してください。」

問1において英語活動中に消極的な態度を示す児童は全くいないと回答したHRTは1名のみであった。その1名の回答は「今年から始めたので全体的に興味があると思う。ALTの先生のおかげもあると思う。」というものであった。

児童の英語学習経験年数と英語活動への興味や意欲との関係は非常に興味深い観点である。学習開始当初に感じた「新鮮さ」をいかに「理解できた喜び」、「できるようになった喜び」へとつなげていくか、そして意欲や興味を持続させていくかは大きな課題である。そのためにも児童の様子を見守り適切な指導を行うことが重要であると考えられる。

3.4 問4

「特に英語活動のどのような場面で児童は不安や緊張を感じていると思われますか？（なお、ここでの「不安」とは「緊張」や「あがり」、それに伴う「ドキドキ感」などを意味し、加療が必要な病的な状態を意味するものではありません。）」

この質問へは自由記述での回答を求めた。得られた1人ずつの回答を小さなカードに記し、同種類の意見をまとめていくことで回答の分類をおこなった。なお、1人の記述に複数の意見が記載されている場合、そのカードを含まれる意見の数だけ複写し、それぞれ異なる意見としてカウントした。つまり複数回答を認める形で分類作業をおこなった。したがって回答者人数と総回答意見数は一致しない。なお、これ以降の自由記述による回答すべてを同様のやり方により分類し、集計した。

下記の表9を見ると、他の学習者の視線がある中で一人あるいはペアで発表する場面が不安の生起に関わっているとHRTの多くが認識していることが伺える。また、新しい言葉を学習したばかりの段階で日本語とは異なる発音をしなくてはならない時や何をしたらよいのか分からない時、文や単語の意味が分からない時などが不安、緊張の要因として挙げられた。これらの結果から「英語」という外国語の学習が日本語での学習にはない緊張感を児童にもたらしめている可能性が伺える。この発表時における不安を軽減するためには、十分な練習の機会と時間を設けることが有効と考える。全体で一斉に声を出して練習する場面ではなく全体として上手に発音できるようになっていると感じることがあるが、それをもって「できるようになった」と判断するのではなく、そこからグループ内で、ペアで、と段階を踏

んで練習をさらに積み、少人数での練習の際に難しさを感じている児童がいないか観察することが大切と考える。このようなステップを踏むことにより、適切に全体練習に戻ったり、あるいは個別の発音練習や発表へと進んだりすることができ、理解と練習が不十分な段階で緊張の中の発表を強いることを減らすことができると考えるからである。

また上記の回答から2人組での会話、コミュニケーション活動において不安を覚えている児童の存在が指摘されたこと、さらにはコミュニケーション活動において自らペアの相手を見つけることに難しさを覚えている児童の存在が指摘されたことから、友達と積極的に関わること自体に苦手意識を覚えている児童にとって英語活動の時間には不安を覚える場面が多いことが推察される。そのような児童がクラスにいる場合には活動設定の段階において十分な配慮をすることが大切であろう。また、評価（ふりかえり）の段階においても会話をした人数やカード等を得た数などのみから評価するのではなく、いかに丁寧な会話ができただか、アイコンタクトをしながら会話ができただか、など複数の評価観点を持ち、積極的に仲間の中に入って行くことが苦手な児童も正しく評価され、自信へとつなげていくことができるように配慮することが有効であると考えられる。

表9 問4 回答結果

不安を感じる場面（不安生起原因）	意見数
みんなの前で一人での発表・発音	49
自信がないとき	13
2人組での会話	8
コミュニケーション活動	6
新しいことばや歌を習うとき	6
文や単語の意味が分からないとき	6
みんなの前で友達と1対1で発表・発音するとき	4
日本語と違う発音をするとき	4
自分で会話の相手を見つけなくてはならないとき	3
ALTからの個別質問に答えるとき	3
指名されるとき	2
間違えたら恥ずかしいという思い	2
ネイティブらしい発音をして笑われることへの不安	2
何をしたらいいか分からないとき	2
間違えることへの不安	1
外で英語を習っている子と比べて出来ないことからくる不安	1

3.5 問5

「1人で発表する場面で答えが分からなくなってしまう児童がいた場合、どのような支援（声かけなど）を行われていますか？」

この質問も自由記述により回答を求めた。

表10 問5 回答結果

支援の種類	意見数
隣に行って答えを教え、それをリピートさせる	28
教師や友達と一緒に答えを言わせる	20
他の児童に助けをもらう	19
答えやヒントを途中まで言い、答えさせる	18
励ます、見守る、安心させることばがけをする	13
質問をもう一度噛み砕いて言う	11
無理強いしない	9
再度全体練習をする	5
他の児童に答えさせる	4
答えの例を示す	3
一緒に考える	2
後回しにする	2
間違えても大丈夫という雰囲気作りをしておく	2
分からないということを Help! や Oh, no! などと表現させる	2

多くの HRT が取っている支援策は、困っている児童のそばに行き、ヒントを与えたり、答えを教えたりし、それをリピートさせるというものであった。この回答からなんとか発表しようとしている児童が最後までやり遂げられるよう支援しようとする HRT の姿が伺えた（表10参照）。また、他の児童に助けをもらうという意見も多く出されていた。文面から実際の様子を想像することは容易ではないが、注意しなくてはならないのは他の児童に助けをもらう際、いかに発表を試みていた児童の自尊心を傷つけないよう流れを作るかということである。松宮（2009）において、児童は発表時に答えが分からなくなってしまう場合、そのまま放っておかれることは望んでおらず、教師からの適切な支援を望んでいるが、しかしながら他の児童に発言を譲ることはあまり望んでいないことが明らかになっている。つまり児童の多くは途中で分からなくなっても最後までやり遂げたい気持ちを持っているものと推察される。その気持ちを尊重しつつ、うまくその場を切り抜ける支援策が望まれるであろう。安易に別の児童を指名することによって、児童の前向きな学習意欲をそいで

しまうことがないように留意することが求められる。

3.6 問6

『『恥ずかしい』、『発表したくない』という児童に対して、あるいはそのような児童がいるクラスでの英語授業に対して、どのような工夫をされますか?』

この質問も自由記述による回答を求めた。その結果、下記の表11のような意見が得られた。

表11 問6 回答結果

工夫の種類	意見数
1人ではなくクラス全体やグループでの発表にする	35
楽しい雰囲気を作る	15
事前に繰り返し練習し、慣れさせる	14
楽しく出来るゲームを仕組む	13
何でも言える雰囲気、受け入れられる雰囲気のある学級づくりをする	12
無理強いしない	9
順番に全員当てるなどして、発表するのは当たり前という雰囲気を作る	9
できたことをしっかり評価し、褒めることで自信と満足感を培う	8
一人で発表する場面を作らない	6
誰でも答えられる簡単な質問を用意する	3
自信がついてから当てる	1
活動の流れをしっかりと伝える	1
言わなくては先に進めないゲームを仕組む	1
発表したくなる場面を設定する	1

まず多くの HRT が取っている方策として、緊張や不安の原因となる1人での発表場면을極力減らし、友達と一緒に発表できる場面を作ることが挙げられた。このことは問4で尋ねた不安の原因(不安生起場面)で最も多かった「みんなの前で一人での発表・発音」をしなくてはならないことへの対応策と考えられる。また、個人発表の段階の前にはしっかりと練習する機会を設け、自信をつけさせてから発表へと移るといった意見も多くみられ、児童の発表場面における緊張感へ対応する工夫を多くの HRT が取っていることが伺えた。それと同時に、日頃からの学級経営の重要性を指摘する意見も多くみられた。英語は新しい教科(学習内容)であり、また学習スタイルも他教科とは異なる部分も多いが、しかしながら決して特別なもので

はない。他の教科と同じように HRT を中心に同じクラスメイトたちと楽しく学んでいくべきものである。その点から考えると普段からのクラスの雰囲気作りの重要性は大きいと言える。HRT の多くが取っている方策のように、しっかり事前練習の機会を設けた上で、どのような間違いも受容される雰囲気の中、個人発表へと進んでいけるような授業が求められるであろう。

3.7 問7

「誰でも発表する場面では緊張したり、失敗したらどうしようと不安になったりします。どうすれば『だから発表しない』、『だから英語はいやだ』という気持ちではなく、『でも頑張りたい』、『でも挑戦してみよう』という気持ちへ導くことができると思われますか？」

この質問も自由記述での解答を求めた。

表12 問7 回答結果

前向きな態度へと導く方策の種類	意見数
日頃から間違いを認める支持的風土のある学級経営をする	27
しっかりほめる	22
楽しい活動を取り入れた楽しい雰囲気の授業にする	16
時間をかけて何度も体験させ、慣れさせ、自信を持たせる	14
成功体験を増やし自信をつけさせる	9
外国の人と話す機会などを設けて目的意識を持たせる	8
日頃から頑張る意欲を育てるような学級経営をする	7
シールなどでやる気を与える	3
教師も苦手意識を乗り越え、一緒に学んでいるという姿勢を示す	3
発表する機会がたくさんある場面設定をした授業づくりをする	3
1時間に多くを詰め込まない	2
無理強いしない	2
教師が動作をつけて見本を見せる	1

この質問に対しては、まず支持的風土のある学級経営の大切さを指摘する意見が多く出された。失敗を認め、そこから学ぶ雰囲気のあるクラスを作ることの大切さを多くの HRT が認識していることが伺える。これは小学校学習指導要領解説（文部科学省、2008）が HRT に求めている「児童が初めて出会う外国語への不安を取り除き、新しいものへ挑戦する気持ちや失敗を恐れない雰囲気を作り出すために、豊かな児童

理解と高まりあう学習集団作り」の必要性を多くの HRT が理解していることを示していると考えられる。

また、初めて学習する言葉であることや、他の教科のように板書を写しながら理解を深めることができない活動であるため、1時間に多くを詰め込まず、少しずつ繰り返し練習することで慣れさせ、自信を持たせていくことを重要と考えている HRT も多かった。あせらず少しずつ成功体験を積み重ねることで自信へと繋がり、それが前向きな姿勢へと発展していくと考えられる。

英語は日本国内で日常生活を送っている限り、さほど必要性のない言語であるため、外国人との交流など英語を使う必要性のある場面を設定することで児童のモチベーションを高めることの重要性を指摘する意見も見られた。

また、シールを与えることなどの「ごほうび」でやる気を高めるという意見も挙げられた。確かに児童はこのような「ごほうび」を喜び、積極的な学習参加へと繋がっていくと思われるが、同時に活動内容自体を楽しく充実したものにする努力を続けていくことが重要である。その努力により「シールがなくても英語は楽しい、面白い」という認識を児童に持たせ、ごほうびにつられて頑張るのではなく、分かることやできることの楽しさのために積極的に活動に参加する児童へと成長していくことと考える。

3.8 問8

「児童が感じる緊張や不安という観点において、英語の時間と他の授業（教科）とで違いはあると思われますか？例えば、国語や社会、理科といった教科にはない「不安や緊張」が英語活動にはあると思われますか？□に✓をつけてください。」

この質問は「ある」、「ない」の2択により回答を求めた。その結果について人数と有効回答（未回答を除いた回答者を100%とする）における「ある」、「ない」それぞれの意見の占める割合を次ページの表に示した。

表13 問8 回答結果

ある	61名	61.6%
ない	38名	38.4%
未回答	23名	-
合計	122名	-
有効回答者合計	99名	100%

この結果を見ると、半数以上の HRT が英語と他教科には何らかの違いがあると

考えていることが分かる。

さらにこの質問に対しては「『ある』とお考えの場合、具体的にはどのような違いが考えられますか？」という自由記述質問を用意した。それに対する回答を分類したところ、表14のような意見が得られた。

表14 問8 回答結果（英語と他教科が異なると思う具体的理由）

英語活動と他教科の違い	意見数
未知の言葉で、自分の発音や発話に絶対の自信が持てないこと	25
言われていることの意味が分からないなど聞き取りへの不安があること	13
初めての教科で1年生からの積み重ねがなく学習方法の応用ができないこと	7
みんなの前で発表するなど自己表現の場面が他教科より多いこと	5
コミュニケーション活動で自分で相手を見つけなくてはならない場面が多いこと	4
学外で英語を習っている児童との差をより大きく子どもたち自身が感じ取ること	4
書いたものに頼れない不安があること	4
英語は実生活で必要がないので学習へのモチベーションが上がらないこと	2
英語の方が楽しいという点で他教科とは違う	2
できたか、できないかが周りの児童に分かりやすいこと	1
ALT と相対することに緊張すること	1
英語は難しいという先入観があること	1
外国へのコンプレックスを感じている児童がいること	1
覚えられないことへの不安があること	1
すごく簡単なことも英語だと言えないという恥ずかしさがあること（特に高学年）	1
教師の自信のなさが児童に伝わりそうな気がする	1

結果を見ると、「英語の方が楽しいという点で他教科とは違う」という意見（灰色網掛け）が2件出されたが、それ以外は英語の方が不安や緊張を感じる場面が多いことを指摘する意見であった。具体的には、やはり他の教科が内容的には初めてであっても共通して「日本語」を用いて学ぶことに対し、英語は初めて学ぶ未知の外国語であり、答えや発音に絶対の自信を持つことが難しく、不安を覚える場面が多いことが指摘された。また、現段階では聞く活動、話す活動を中心に授業が行われるため、聞いてすべてを覚えて、それを再生（発話）しなくてはならないことに難しさを覚えている児童がいると考える HRT も多いようであった。さらに、他教科と比べ自己表現をする機会が多い、つまりは他者の前で発言する機会が多いことも指摘され、そのことにより不安を感じる児童がいるのではないかという意見が出された。問6の質問に対して HRT の多くが1人での発表場面をできるだけ避け、グループや全体での発表をするよう工夫をしていることが明らかになったが、それ

でも他教科と比較すると発言の機会が多い授業となっていると考えられる。そしてそれらの発話を「未知の言語」で行うことが求められるという点において英語活動を他教科とは異なるものと感じているのではないであろうか。

また、学外で英語を習っている児童と全く初めて学ぶ児童の差が教室内で歴然としてしまう点も指摘されている。確かに実際に教室に立っていても「〇〇ちゃんは英語を習っているから…。私は習ってないから分からない」といった発言を耳にすることがある。学外で学ぶ機会を持たなかった児童が英語学習の出発地点から他者と比べてやる気を喪失することがないように支援することは非常に重要なことと考える。

最後に高学年の児童が日本語で考えること、言えること、できることと英語の時間に学ぶことのレベルが乖離している場合にも児童の学習意欲低下につながるものと予測される。英語という言語学習においては初歩段階にあるため、当然1から始めていく必要があるが、できるだけ児童の発達段階に適した活動内容を工夫することが肝要であろう。

4. まとめと今後の課題

以上、HRT の目から見た英語活動中の児童の様子に関する調査結果を検討した。調査結果全体から、HRT たちの多くは英語活動において消極的である児童の存在を認めており、また英語が児童に緊張や不安をもたらす機会のある授業であることを感じつつも、様々な工夫により乗り越えることができると確信していること、特に学級経営の在り方によって多くの問題を解決できると感じていることが明らかになった。

多くの HRT にとって英語を指導することは初めての経験であり、また内容が外国語であることから教師自身不安を覚えている人も多いのではないかと思われる。しかしながら恐れるだけでなく、英語も1つの教科に過ぎず、日頃からのクラスの雰囲気作りや段階を踏んだ指導で他教科と同じく児童を導いていけると感じていることが分かった。英語の指導は初めてであっても、児童の指導という点においては多くの経験を持つ HRT だからこそ持てる自信であり確信であると感じ、非常に頼もしく感じられた。また HRT にとっても新しい授業であるため、自らの指導に意識が集中してしまいがちなのではないかと懸念したが、児童の様子をしっかりと把握していることや支援が必要と感じられる児童にはそばに立ってサポートを行うなど適切な対応を試みていることが明らかとなったことは、今後の「外国語活動」においても応用できる頼もしい結果であったと考える。

しかしながら、今回の調査はあくまで HRT の目から見た児童の様子と、HRT の自己申告による授業内のサポート実施状況を明らかにしたものであった。果たして HRT は自らが行っていると考えている支援策を、実際に適切な場面で実践できているのであろうか。この点については今後、授業観察などを通して検討していく必要があると考える。さらには、HRT の感じていることや見取っている児童の様子と実際の教室内での児童の様子は一致しているのか、HRT による支援は児童に受け入れられているのか、うまく機能しているのか等を検討していきたいと考えている。それにより、HRT 側の考えだけでなく、児童と HRT の双方にとって効果的に機能する支援の在り方や授業の進め方を検討していきたいと考える。

注

- (1) これまで多くの小学校において「総合的な学習の時間」等を活用して実践されてきた「英語活動」および平成20年3月28日の学習指導要領改訂に伴い導入が決まった「外国語活動」は教育課程上の位置付けは「教科」ではない。しかしながら、「他の教科の学習と変わらないものである」というニュアンスを表現するため、本文中で「教科」という言葉を用いた。

引用文献

- Horwitz, E.K., Horwitz, M.B., & Cope, A.J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132.
- 松宮奈賀子 (2009) 「小学校英語活動における児童の『不安の強さ』と『求める教師支援』との関係」. 『広島経済大学研究論集』 31-4, 53-70.
- 文部科学省 (2004) 「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 外国語専門部会 第4回資料4-①『小学校英語活動実践の手引き』作成の基本的考え」.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/04070501/006.pdf
- 文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編 平成20年8月』東洋館出版社.
- Young, D.J. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23, 539-553.

〔付録〕 質問紙

英語活動における児童の様子に関する調査

小学校における英語活動(外国語活動)では、英語嫌いをつくらないことが重要とされています。そのような英語活動を行うためには、児童の「気持ち」に寄り添った授業を展開していくことが必要と思われまます。この調査では実際の英語の授業場面における児童の様子について、先生方の目から見てのご意見を頂戴し、今後の英語活動(外国語活動)のあり方を考えるために役立てたいと思っております。どうぞご協力くださいますようお願い申し上げます。

なお、この調査は科学研究費補助金 課題番号 20720155(文部科学省)による補助を受けて実施しております。皆様からご提供いただいたご意見および個人情報は厳重に管理し、研究の目的以外に使用することはありません。

□に✓をつけてください

性別	<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性
年齢	<input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代
教員経験	<input type="checkbox"/> 5年未満 <input type="checkbox"/> 5年以上 10年未満 <input type="checkbox"/> 10年以上 15年未満 <input type="checkbox"/> 15年以上 20年未満 <input type="checkbox"/> 20年以上 25年未満 <input type="checkbox"/> 25年以上 30年未満 <input type="checkbox"/> 30年以上
<u>英語活動</u> 指導経験	<input type="checkbox"/> 3年未満 <input type="checkbox"/> 3年以上 5年未満 <input type="checkbox"/> 5年以上 10年未満 <input type="checkbox"/> 10年以上
中学校/高等学校 外国語(英語)教員免許状の有無	<input type="checkbox"/> 有り <input type="checkbox"/> 無し



1. 英語活動の時間に英語で発表を嫌がったり、消極的だったりする児童はいますか？

1つ選んで✓をつけてください。

- かなりいる
- 数人(5人程度を目安とする)いる
- ほとんどいない(3人以下)
- 全くいない

2. 上の質問で「かなりいる」、「数人いる」、「ほとんどいない」を選ばれた方へ。

その理由は何だと思われますか？当てはまるものに✓をつけてください(複数可)。

また、その他のご意見があれば、記述してください。

- もとものの性格(大人しい, 消極的, 恥ずかしがり屋など)
- 英語に対する自信のなさ
- 英語に限らない学習意欲の低さ
- クラスの雰囲気
- その他

3. 1.の質問で「全くいない」を選ばれた方へ

その理由は何だと思われますか？当てはまるものに✓をつけてください(複数可)。

また、その他のご意見があれば、記述してください。

- もとものの性格(積極的, 元気がある)
- 失敗を認め合うクラスの雰囲気
- 英語に限らない学習意欲の高さ
- その他

4. 特に英語活動のどのような場面で児童は不安や緊張を感じていると思われますか？
(なお、ここでの「不安」とは「緊張」や「あがり」、それに伴う「ドキドキ感」などを意味し、
加療が必要な病的な状態を意味するものではありません。)



5. 1人で発表する場面で答えが分からなくなってしまった児童がいた場合、どのような支援(声かけなど)を行われていますか？



6. 「恥ずかしい」、「発表したくない」という児童に対して、あるいはそのような児童がいるクラスでの英語授業に対して、どのような工夫をされますか？



7. 誰でも発表する場面では緊張したり、失敗したらどうしようと不安になったりします。どうすれば「だから発表しない」「だから英語はいやだ」という気持ちではなく、「でも頑張りたい」、「でも挑戦してみよう」という気持ちへ導くことができると思われませんか？

8. 児童が感じる緊張や不安という観点において、英語の時間と他の授業(教科)とで違いはあると思われませんか？例えば、国語や社会、理科といった教科にはない「不安や緊張」が英語活動にはあると思われませんか？□に をつけてください。また、「ある」とお考えの場合、具体的に教えてください。

- ある
 ない

「ある」の場合、具体的にはどのような違いが考えられますか？

調査へのご協力をありがとうございました。

広島経済大学 松宮奈賀子

n.matsu1321@hue.ac.jp